



[評者]

岩田 健太郎

神戸大学大学院教授・感染治療学/神戸大学病院感染症内科

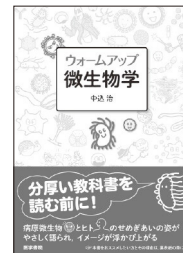
ウォームアップ 微生物学

中込 治 著

●A5 頁 232 2022 年 3 月

定価：2,420 円 (本体 2,200 円+税 10%)

[ISBN978-4-260-04929-0] 医学書院刊



微生物学は医学部のカリキュラムのなかでも特に人気がない。これは、微生物学が魅力のない学問であることを意味しない。微生物学の魅力を授業や実習のなかで学生に実感させることに、われわれが失敗してきただけだ。

長々とした(しかも、コロコロ変更される)菌の名前には魅力がない。かつて、ニューヨーク市で教えていたばかりの指導医の1人は「学びにはセクシーさがなければならない」と言っていたが、それは事実だ。

セクシーさには属人性が必要だ。物語も必要だ。ピュアな学問には属人性も物語も関係ない、という意見もある。坂本龍馬を、史実を根拠に歴史の教科書から外してしまえ、というのはそういう見解だ。しかし、短期的にはそれは歴史学の学習にオーセンティシティを与えるが、長期的には歴史フィルを増やさないことから失敗だとぼくは考える。『竜馬がゆく』を読ませて歴史好きを作ったほうが、急がば回れで正解だ。微生物に魅惑される学生を増やすためには、微生物学をセクシーにするには、仕掛けが必要で、人を魅了する一番シンプルな方法は属人性と物語なのだ。

われわれは、*Candida krusei* が *Pichia kudriavzevii* という発音法もわからないものに改称されてもうんざりするだけだが(まじ

で)、レーウェンフックやグラムやパスツールやコッホやエールリッヒや北里やフレミングの物語は大好きなのだ。そこに素敵なイラストがついていれば、なおさらなのである。

炭は一度、点火してしまえば、あとは何もしなくても赤々と燃え続ける。バーベキューで炭に火がつくまでが一苦労なのと同じで、学生たちのハートに火をつけるのが、一番の苦労なのだ。

これを別名、ウォームアップという。本書はまさに『ウォームアップ微生物学』なのであり、属人性と物語、優しいイラストから読者を魅惑し、イケてるグラム陰性菌や、恐ろしい毒素とスマイリーなトキシソイドたちがさらに読者をザ・微生物ワールドに引きずり込むのである。

ここまでやってしまえば、あとは何もしなくてよい。われわれの業界には感染症を媒介するダニの収集が三度の飯より好き、とか、顕微鏡で変わった細菌を発見するとヨダレが出てくるとか、感染性心内膜炎を起こすグラム陰性菌の名前を全部そらで言えるといったヘンタ……、いや、微生物に魅せられた人々でいっぱいだ。繰り返す。微生物学という学問そのものは魅力に満ちているのだ。嘘だと思ったら、ぜひ本書を読んで、引きずり込まれてください。